

# 地図からみた東南アジアへの華人の移住と チャイナタウンの形成

山下 清海\*

## I. はじめに

世界のさまざまな移民のなかで、華人ほど地球上のあらゆるところに広く分布し、各地で独自の特色ある集中居住地域を形成し、バイタリティあふれる生活を展開している民族集団は、ほかにはいないのではないだろうか。

従来から「華僑」と呼ばれてきた海外在住の中国系移民とその子孫に対して、今日では「華人」という呼称が広く用いられている。もともと、華僑の「僑」は、「僑居」すなわち「仮住まい」という意味をもち、「華僑」とは、中国を離れて海外に「仮住まい」する中国人のことを指した<sup>1)</sup>。

今日の中国では、主として国籍にもとづいて、中国籍を保有している人びとに対して「華僑」の呼称を用い、すでに中国籍を離脱し、居住地等の国籍を有している人びとを一般に狭義の意味で「華人」と呼んでいる。これら両者をまとめて取り上げる場合には、「華僑華人」と並列することが多い。

しかし、たとえ依然として中国籍を保有していても、すでに居住地の社会に定着している者も多く、居住地の人びととの混血も進行しており、彼らのアイデンティティも多様である。厳密に狭義の意味で「華僑」と「華人」を明確に区別することはきわめて困難であり、常に「華僑華人」と表記することもやや煩わしい。筆者は、中国大陸で用いている「華僑」・「華人」の両者をまとめ、海外に居住している中国系住民とその子孫に対し、総称として「華人」と呼んできたが、本稿においても一貫して「華人」と表現することにする。

海外在住の華人を対象にした研究は、歴史学、経済学、社会学、文化人類学などさまざまな学問分野からなされてきた。しかし、地理学からの華人研究は、非常に少ないといわざるを得ない。その結果として、華人に関する地図はきわめて乏しい。分布、移動、居住、景観、土地利用など華人のさまざまな側面を地図化することこそ、華人研究において、他の学問分野から地理学に大いに期待されていることであろう<sup>2)</sup>。

本稿では、華人に関する従来の研究において、華人の諸特徴を地図化した成果にもとづいて、華人の東南アジア移住の特色について考察をすすめていく。まず、世界における華人の人口と分布について概観したあと、中国南部の華人移民の出身地の地域的特色について、また、東南アジアへの華人の移住とそこにおける華人の居住パターンについて検討する。最後に、移住先における華人方

\*東洋大学国際地域学部；Faculty of Regional Development Studies, Toyo University

言集團の「すみわけ」<sup>3)</sup> について、シンガポールの事例をとりあげ、具体的に論じることにする。

## II. 世界における華人の人口と分布

世界的スケールで華人人口に関する信頼度の高い統計は存在しない。中国大陸側も台湾側も、華人という彼らにとっての「同胞」の人口を、多めに推定する傾向があるように思われる。世界の華人人口は1,800万人、2,000万人、3,000万人といった具合に、さほど根拠のない推定がひとり歩きしている。そもそも、混血が進み、国籍さえ多様化している状況で、ほとんどの国において、人口センサスや在留外国人に関する統計においても、正確な華人人口は十分に把握されていない。

表1は、中国大陸側の推計にもとづき、世界における華人人口20万人以上を有する国を示している。これは、華人人口に関する正確な統計がないなかで、いちおうの目安として掲げたものである。『華人経済年鑑(2000~2001)』(華人経済年鑑編委会編、朝華出版社、北京、2001年、p.454)によれば、世界の華人の総人口は約3,000万人あまりで、そのうちの90%以上はすでに帰化しており、中国籍保有者は200万人あまりと推定している。

チャン(Chang, Sen-dou)は、華人の分布パターンと華人の職業の変遷について、グローバルな視点から考察した<sup>4)</sup>。図1は、台湾側の推計にもとづく1963年頃の世界の華人分布図である。チャンは、世界の華人の分布パターンの特色を、tropical, coastal, urban という3つの形容詞で端的に表した。

表1 世界における華人人口20万人以上を有する国

地域	国名	人口(万人)	統計年次
アジア	インドネシア	1,100	2000
	タイ	645	1999
	マレーシア	80	1998
	ミャンマー	30	1999
	シンガポール	274	1999
	カンボジア	50	2000
	フィリピン	200	2000
	ベトナム	120	1998
	日本	27	1999
南北アメリカ	アメリカ	83	1999
	カナダ	100	2000
	ペルー	100	1999
	ブラジル	25	1999
ヨーロッパ	ロシア	100	1999
	フランス	30	2000
	イギリス	20	2000
オセアニア	オーストラリア	50	2000

注：華人経済年鑑編委会編：『華人経済年鑑(2000~2001)』朝華出版社、北京、454-463頁、2001年により作成。

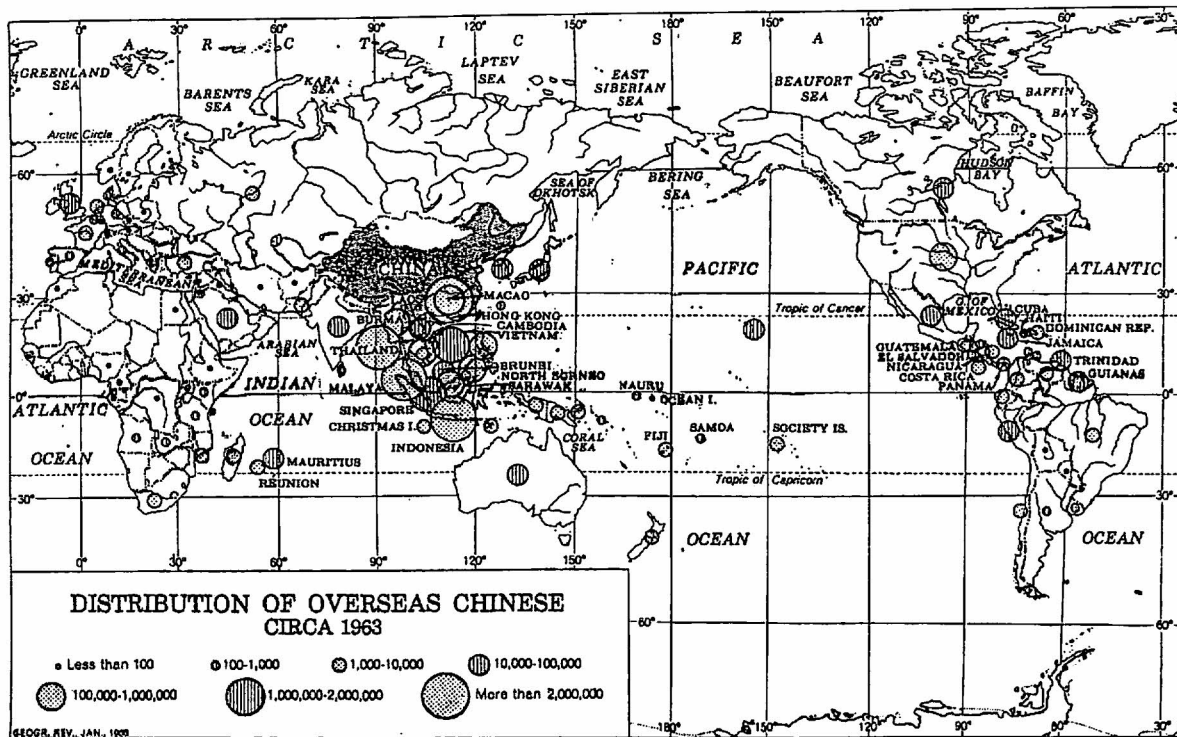


図1 世界の華人人口の分布 (1963年頃)

Chang, Sen-dou: The distribution and occupation of overseas Chinese. *Geographical Review*, Vol.58, p.98, 1968による。

すなわち、華人は東南アジアやカリブ海地域など熱帯に多く分布している。これは、熱帯におけるヨーロッパ人の植民地開発、とりわけプランテーション経営において、勤勉で安価な労働力として、多量の華人労働者が必要とされたという歴史を物語っている。

次に、華人は沿岸部に多く分布している。これは、華人の職業や移住の経緯を考えると、当然の結果でもある。華人がまず上陸するのは港であり、また、貿易をはじめ経済活動に有利な沿岸地域に華人は多く居住した。世界の主要なチャイナタウンは、ほとんどが港湾都市（港町）に形成されている。例えば東南アジアでは、シンガポール、ペナン、ジャカルタ、バンコク、ホーチミン（サイゴン）、ヤンゴン（ラングーン）、北アメリカのサンフランシスコ、ニューヨーク、バンクーバー、ヨーロッパのロンドン、アムステルダム、オーストラリアのシドニー、メルボルン、日本の三大中華街（横浜・神戸・長崎）などである。

華人は都市部に居住する傾向が強い。初期の華人移民は、プランテーションの契約移民や鉱山労働者であったり、あるいは北アメリカのようにゴールドラッシュや大陸横断鉄道建設などの労働に従事する者が多く、都市部より農村部に居住する傾向があった。しかし、彼らの多くは、契約期間や工事の終了後は、新しい職を求めて都市へ再移住した。アメリカやカナダでは、華人に対する排斥運動が高まるにつれ、華人はより安全な大きな都市のチャイナタウンに集中していった。

### III. 僑郷—華人移民の出身地

海外在住の華人の出身地を、中国では「僑郷」(「華僑の故郷」という意味)と呼ぶ<sup>5)</sup>。主要な僑郷は、中国南部の福建省、広東省、および海南省の沿岸部にとくに集中している。これらの地域は、人口密度が高く、貧しい地域であった。しかし、このような状況の地域は、中国各地に存在する。僑郷がこれらの地域に集中している重要な要因として、古くから航海技術が進んでおり、東南アジアをはじめとする海外との交流の歴史があり、海外に関する情報が多くもたらされてきた伝統があったことが重要であると筆者は考えている。多少の冒険をしても、海外に渡れば高収入が得られ、だれにも豊かな生活が約束されているかのような理想化された多くの情報は、その地域の人びとの海外移住を助長した。

図2に示したように、海外華人を多く送出してきた華南で日常使用されている中国語の方言は多種にのぼる。しかも、これらの方言相互間の差異はきわめて大きい。日本人の感覚からすれば、それらは「方言」というよりも、「外国語」をイメージした方が実状に近いだろう。

たとえば、広州や香港周辺の広東人は広東語を用いるが、福建省南部の廈門周辺の福建人が話す福建語(閩南語)と広東語は発音が大きく異なり、「普通話」(標準中国語)のような共通語を用いるか、通訳を介さずには、広東人と福建人は相互にコミュニケーションができない。また、同じ福建省内でも、北部の省都福州と南部の主要都市廈門のわずか200kmあまりの間の地域において、福州語、福清語、興化語、福建語(閩南語)などの方言が話されている。

このような方言間の大きな差異は、海外在住の華人に方言集団のアイデンティティを強く意識させることになった。今日、マレーシアやシンガポールでは、初対面の華人同士が会話を始めるとき、何語を用いるか迷うことになる。まずは、その地域でもっとも有力な中国語の方言(例えば福建語)、華語(標準中国語)、あるいは英語で話しかける。そのうち、相手の華人がどの方言集団に属するか

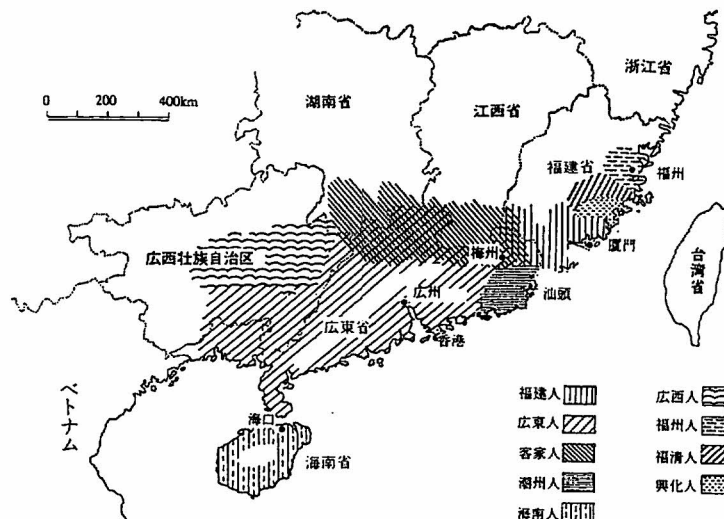


図2 中国南部における華人方言集団のおもな出身地

山下清海：世界に広がる華人社会。高橋伸夫ほか編：『ジオグラフィー入門—地理学でみる日本と世界—』105頁、古今書院、1996年による。なお、原図は、Purcell, V.: *The Chinese in Southeast Asia*. Oxford University Press, 2nd ed., London, p.6, 1965.

わかった上で、お互いにとってもっとも適当な言語で会話が進められていく。しかし、第二次世界大戦前の東南アジア各地の華人社会では、大多数の華人は十分な教育を受けておらず、自分たちの方言以外の言語はほとんど理解できない者が多かった。その結果、同一の華人方言集団のメンバーは、集中して居住する傾向が強かった。

図3は、福建省におけるおもな僑郷の分布を示したものである<sup>6)</sup>。福建省には、北から閩江・晋江・九龍江・汀江の4つの主要河川が流れている。これら4つの河川の流域は、東南アジアの華人方言集団の出身地とよく対応している。

福州人の僑郷は閩江の下流域に位置している。福建人（閩南人ともいう）の出身地は、旧泉州府と旧漳州府に分けられる。晋江下流域が旧泉州府であり、九龍江下流域が旧漳州府である。福建人の海外移住の主要な港であった廈門の郊外の集美（現在は廈門市に属する）は、かつてのマラヤのゴム王として、また社会主義中国の祖国建設に貢献した「愛国華僑」として知られる陳嘉庚（Tan Kah-kee、1874-1961）の出身地である。陳嘉庚は自分の故郷である集みの教育発展のために、私財を投じて中学、師範学校をはじめ各種の学校を建設し、「集美学村」をつくりあげた。

北の閩江と南の晋江という2つの河川流域の中間地帯が、福清人および興化人（莆田・仙遊周辺出身者）の僑郷である。福建省南部の内陸地帯を流れ下る汀江は、途中で広東省に入り韓江に合流する。韓江の上流部一帯は客家人の居住地域である。これらの地域には、客家人特有の巨大な円楼



図3 福建省における主要な河川とおもな僑郷

山下清海：福建省における華僑送出地域（僑郷）の地理学的考察—その地域的特色と移住先との結びつき—。可見弘明編：『僑郷華南—華僑・華人研究の現在—』、44頁、行路社（京都）、1996年による。

(円形住居) がみられる。台湾の李登輝元総統の祖先も、福建省永定地方出身である。

このように、山がちな地形の福建省においては、主要な河川流域ごとに互いに差異が大きな方言が使用され、多くの方言集団が形成されてきた。

#### IV. 東南アジアへの華人の移住とチャイナタウンの形成

斎藤一正は、東南アジア華人の出身地と主要な移住先を地図に示した<sup>7)</sup> (図4)。東南アジアへ移住した華人の主要な出身地は、福建省と広東省(現在の海南省を含む)である。特に両省の沿岸部からの移住が多かった。華人移民のおもな出発港は、北から福建省では福州、泉州、廈門、広東省では汕頭、香港、広州、そして海南島の海口などであった。

図中で「インドシナ4国」となっているのは、ラオス・カンボジアに当時の南北ベトナム2国を加えたためである。タイでは潮州人が、マラヤ・シンガポール、インドネシア、フィリピンでは福建人が、インドシナや英領ボルネオでは広東人が、それぞれの地域の華人社会において卓越してい

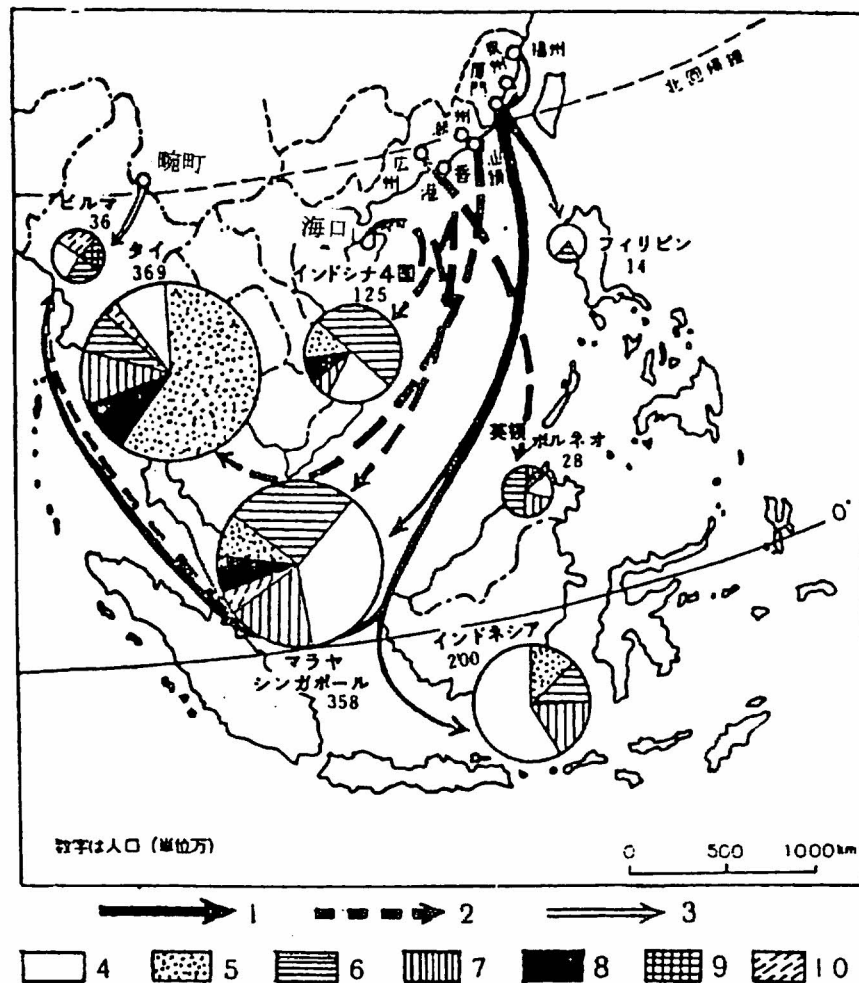


図4 華人移民の東南アジアへの進路

- 1. 福建系の進路    2. 広東系の進路    3. 雲南系の進路
- 4. 福建人    5. 潮州人    6. 広東人    7. 客家人    8. 海南人    9. 雲南人    10. 広西人その他

斎藤一正：東南アジアにおける華僑の生態—その経済的地位—。人文地理、第13巻、第3号、243頁、1961年による。

る。潮州人、福建人、広東人などの東南アジアへの華人の移住ルートが、大部分は海路であったのに対し、例外的存在なのが、陸路で国境を越えミャンマー(ビルマ)に移住した雲南人である。ミャンマー北部の中心都市マンダレーの華人社会では、雲南人が有力な方言集団となっている。

表2は、東南アジアの主要な国々における華人人口の方言集団別構成をみたものである。現地人との混血が進み、華人としてのアイデンティティもしいだいに希薄化していくなかで、華人人口に関する正確な統計は得にくい。東南アジアにおいて、比較的信頼できる華人人口の統計が公表されている国は、シンガポール・マレーシア・ブルネイに限られよう。各国における最大の華人方言集団をみると、タイでは潮州人、インドネシア・シンガポール・マレーシアでは福建人である。インドネシアでは、かつてオランダ植民地時代に、人口センサスにおいて華人方言集団別の調査項目があったが、今日では、華人の総人口さえ、植民地時代の統計にもとづいて推定されているものと思われる<sup>8)</sup>。

次に、マラッカとジャカルタを例に、東南アジアに移住した華人が、植民地都市においてどのような居住パターンをとり、チャイナタウンを形成していったかについてみてみよう。

マラッカ海峡に面するマラッカは、マラッカ王国の首都として、また重要な交易都市として栄え、また戦略上の重要拠点であったがゆえに、ヨーロッパの植民地争奪の目標になった。図5は、ポルトガル統治時代の1613年に描かれたマラッカの地図である。マラッカ川の河口左岸には、囲郭をめぐらした要塞が造られていた。また、河口右岸には、中国の明代において、すでに華人集落(Kampong China)すなわちチャイナタウンが形成されていたことがわかる。華人のほかに、インド人、ジャワ人などの集落も描かれており、国際都市マラッカでは、異なる民族集団の明瞭なすみわけがみられた<sup>9)</sup>。

ジャカルタは、今日では人口2億を超える大国インドネシアの首都であるとともに、華人の最大の中心地である。図6に示したように、ジャカルタのチャイナタウンは、市内北部のコタと呼ばれる旧市街地に形成された。コタはオランダ植民地時代の貿易の中心地であった。1602年には、オランダ東インド会社が設立された。今日のチャイナタウンは、コタ駅の南に隣接するグロドック

表2 東南アジア主要国における華人人口の方言集団別構成

(単位：%)

	満洲人	福建人	広東人	客家人	海南人	その他	資 料	華 人 総 人 口
タ イ	56	7	7	16	12	2	1955年推定 スキナー(1981)	480万人(1980年頃) 台湾側推定
シンガポール	22.0	43.1	16.5	7.4	7.1	3.9	1980年人口 センサス	186万人(1980年)
マレーシア	11.7	33.9	17.7	24.1	3.7	8.9	1980年人口 センサス	414万人(1980年)
インドネシア	7.4	46.6	11.4	16.9	※	17.7	1930年人口 センサス	450~600万人(1983年頃) 台湾側推定

注 ※は、その他に含まれる。

台湾側推定は、『華僑経済年鑑 中華民国70-71年』にもとづいて算出したもの。

山下清海；僑郷としての広東省潮州地方の社会地理学的研究—華僑送出地域と東南アジア華人社会との結びつき—。秋田大学教育学部研究紀要(人文科学・社会科学)、第41集、150頁、1990年、による。

(Glodock) 一帯に形成されている。

オランダ東インド会社は、植民地貿易において華人の経済的能力に期待すると同時に警戒心も抱いていた。このため、華人を市街地の特定地区に集中居住させた。この地区が、今日のチャイナタウンの起源となった。オランダの商館や役所が建ち並んだ地区の南に、チャイナタウンが形成された<sup>10)</sup>。

よく知られているように、インドネシアのチャイナタウンは、従来からたびたび発生した反華人

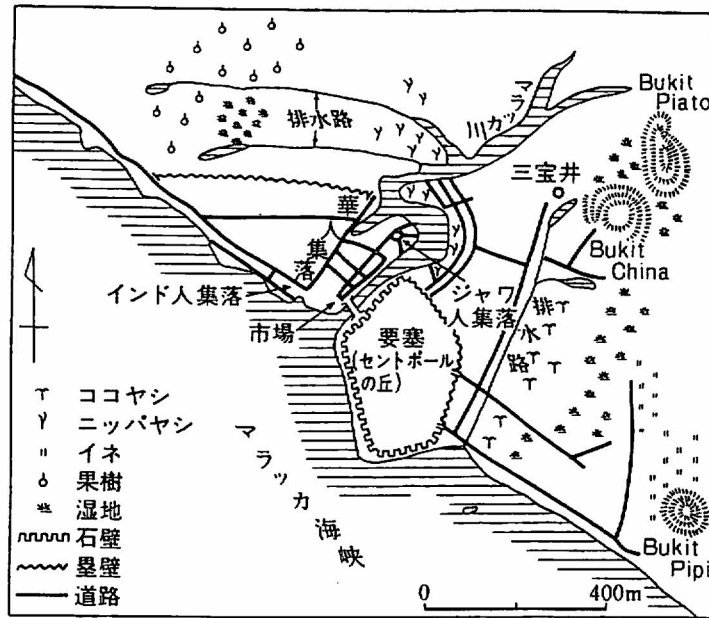


図5 ポルトガル領時代のマラッカ (1613年頃)

山下清海：『東南アジアのチャイナタウン』 83頁、古今書院、1987年による。

なお、原図は、Sandhu, K.S.: Chinese colonization of Malacca: a study in population change, 1500 to 1957 A.D. *Journal of Tropical Geography*, Vol.15, p.4, 1961.

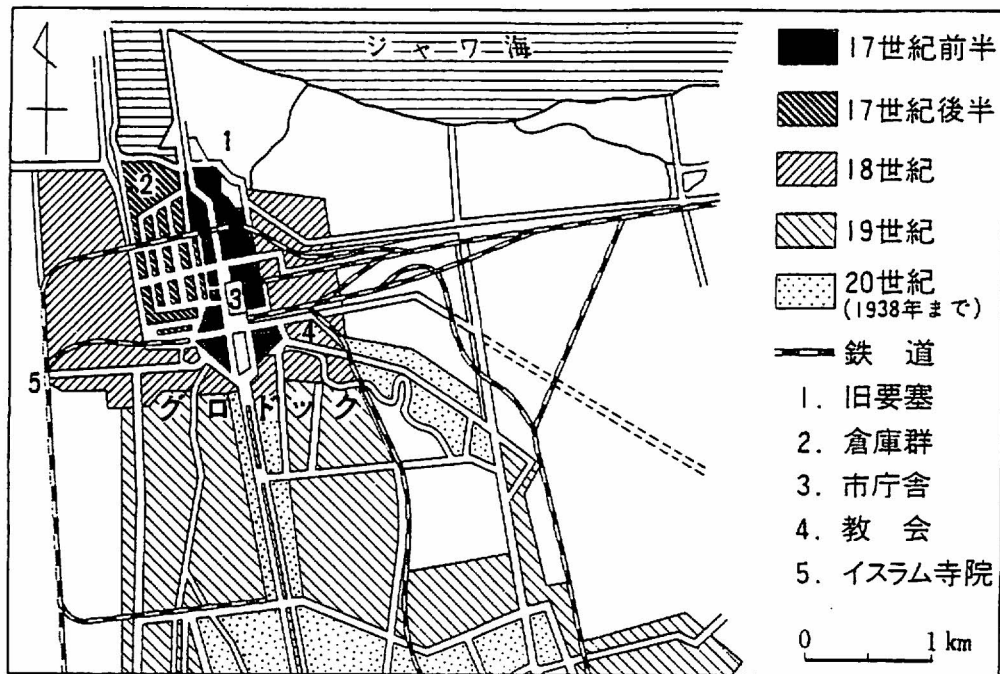


図6 ジャカルタ市街地の拡大

山下清海：『東南アジアのチャイナタウン』、119頁、古今書院、1987年による。

なお、原図は、Abdurrahman Surjomihardjo: *The growth of Jakarta*. Penerbit Djambatan, Jakarta, p.54, 1977.



暴動のたびに略奪や放火などを被ってきた。最近でも1998年5月に発生したスハルト大統領に反対する抗議行動が、反華人暴動へ飛び火し、グロドックのチャイナタウン内の華人商店は略奪、焼き討ちの大きな被害を受けた。

### V. シンガポールにおける華人方言集団のすみわけ

1819年、イギリスの植民地行政官ラッフルズ (Stamford Raffles, 1781-1826) は、シンガポール川河口に上陸した。それ以後、淡路島ほどの面積のシンガポールは、自由貿易港として急速に発展していった。

ラッフルズは、図7に示したように、民族別の居住分離を考慮した都市計画を立てた。植民地経済の発展において、ラッフルズは勤勉な華人の役割に期待して、商業活動に便利なシンガポール川南岸(華人は「大坡」とよぶ)の商業地区に隣接する場所を、華人居住地に指定した。華人の大量流入は、この地区を大規模なチャイナタウン(オールドチャイナタウン)に発展させるとともに、シンガポール川の北岸地区(「小坡」とよぶ)のヨーロツ

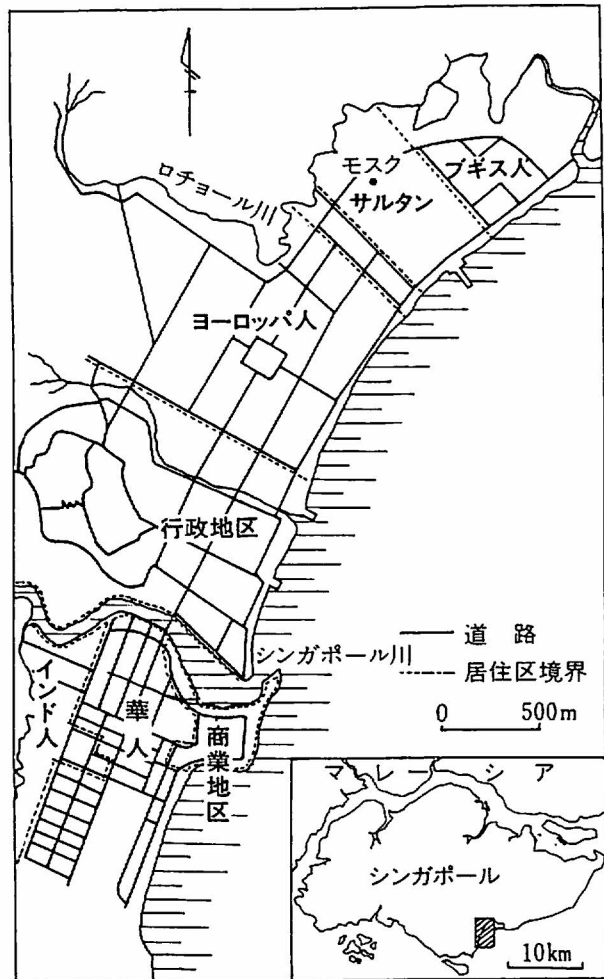


図7 シンガポール中心部における民族集団別の居住区画プラン(1828年)

山下清海：『東南アジアのチャイナタウン』、53頁、古今書院、1987年による。

なお、原図は、Turnbull, C.M.: *A history of Singapore, 1819-1975*. Oxford University Press, Kuala Lumpur, p.xvi, 1977.

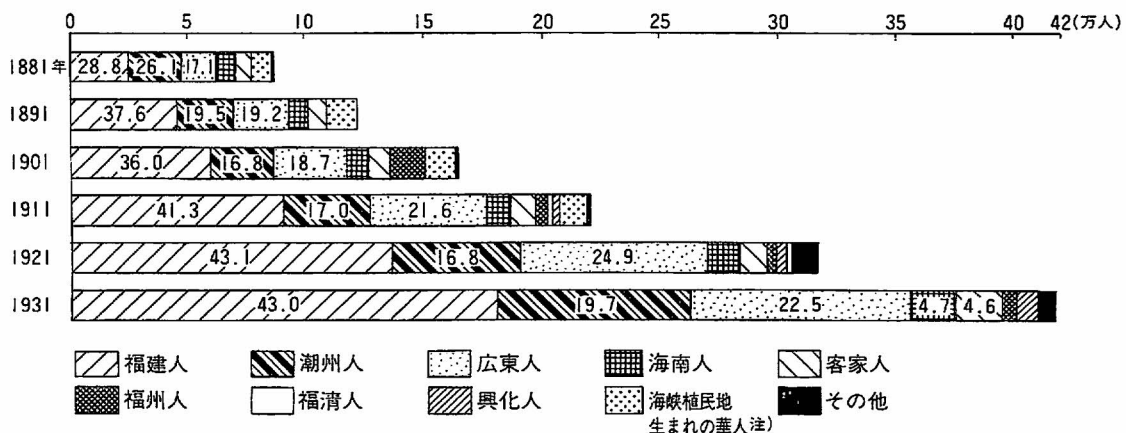


図8 シンガポールにおける華人方言集団の人口構成の推移(1881~1931年)

注) グラフ内の数字は、華人全体に占める当該集団の割合(%)を示す。

山下清海：『シンガポールの華人社会』、45頁、大明堂、1988年による。

パ人居住地に予定されていた地区をニューチャイナタウンに変えていった。ヨーロッパ人は、もともと彼らに用意されていた居住地が低湿地であったことを嫌い、内陸の高台の水はけのよい土地を好んで居住した。

シンガポールは、総人口の約4分の3が華人であり、その華人社会は、さまざまな華人方言集団から構成されてきた。図8は、第二次世界大戦前の華人方言集団別の構成を示したグラフである。シンガポールのような大規模なチャイナタウンになると、福建人街、潮州人街、広東人街、海南人街のように華人方言集団ごとに集中居住地区が形成された。すなわち、シンガポールの華人社会では、華人方言集団の明瞭なすみわけがみられた。しかし、このよな華人方言集団のすみわけを地図化したものは、きわめて少ない。なぜなら、地図化に必要な華人方言集団ごとの地区別の人口統計が得にくいためである。

このような状況の中で、図9に示した Hodder の図は、華人社会の地理学的研究のもっともすぐれた成果の一つである<sup>11)</sup>。Hodder は、シンガポール改良信託局が行った調査データを用いて、当時の華人、マレー人、インド人の民族集団、および華人方言集団の相互のすみわけパターンを地図化した。シンガポール川の南岸の「大坡」地区は、福建人・潮州人・広東人の有力な三大方言集団が明瞭にすみわけていた。これに対し、北岸の「小坡」地区は、三大方言集団が多数を占めるものの、

遅れて移住してきた海南人その他の少数派の方言集団が、モザイク状にすみわけた<sup>12)</sup>。

華人方言集団に関する細かな地区ごとの人口統計が得られない状況において、筆者は、華人方言集団の人口分布の指標として、華人方言集団の会館および廟を用い、それらの分布図を、1850年頃、1890年頃、1940年頃、1968年頃、および1980年頃という時期に分けて作成して、華人方言集団のすみわけの形成と崩壊のプロセスについて考察した<sup>13)</sup>。それらの分布図の一例である図10は、1980年頃のシンガポールにおける華人方言集団の会館および主要な華人の廟の分布を示したものである。この時期は、シンガポール中心部における大規模な都市再開発が進行中の時期であり、華人方言集団の伝統的なすみわけパターンが、崩壊しつつある時期である。シンガポール中心部におけるこのような華人方言集団のすみわけパターンは、1960年代から始まった都市再開発の進行にともない、急速に消失していった。

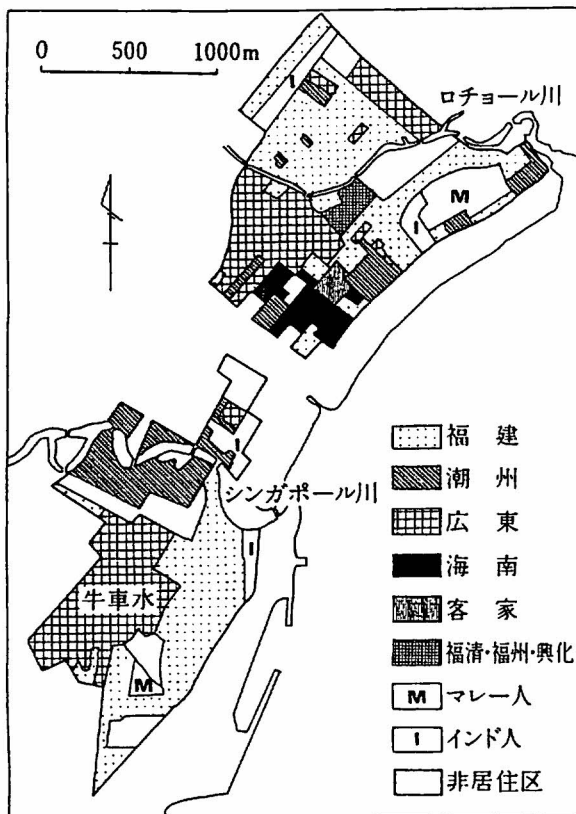


図9 シンガポール中心部における華人方言集団のすみわけ (1952年)

山下清海：『東南アジアのチャイナタウン』、57頁、古今書院、1987年による。

なお、原図は、Hodder, B.W.: Racial groupings in Singapore. *Malayan Journal of Tropical Geography*, Vol.1, p.35, 1953.

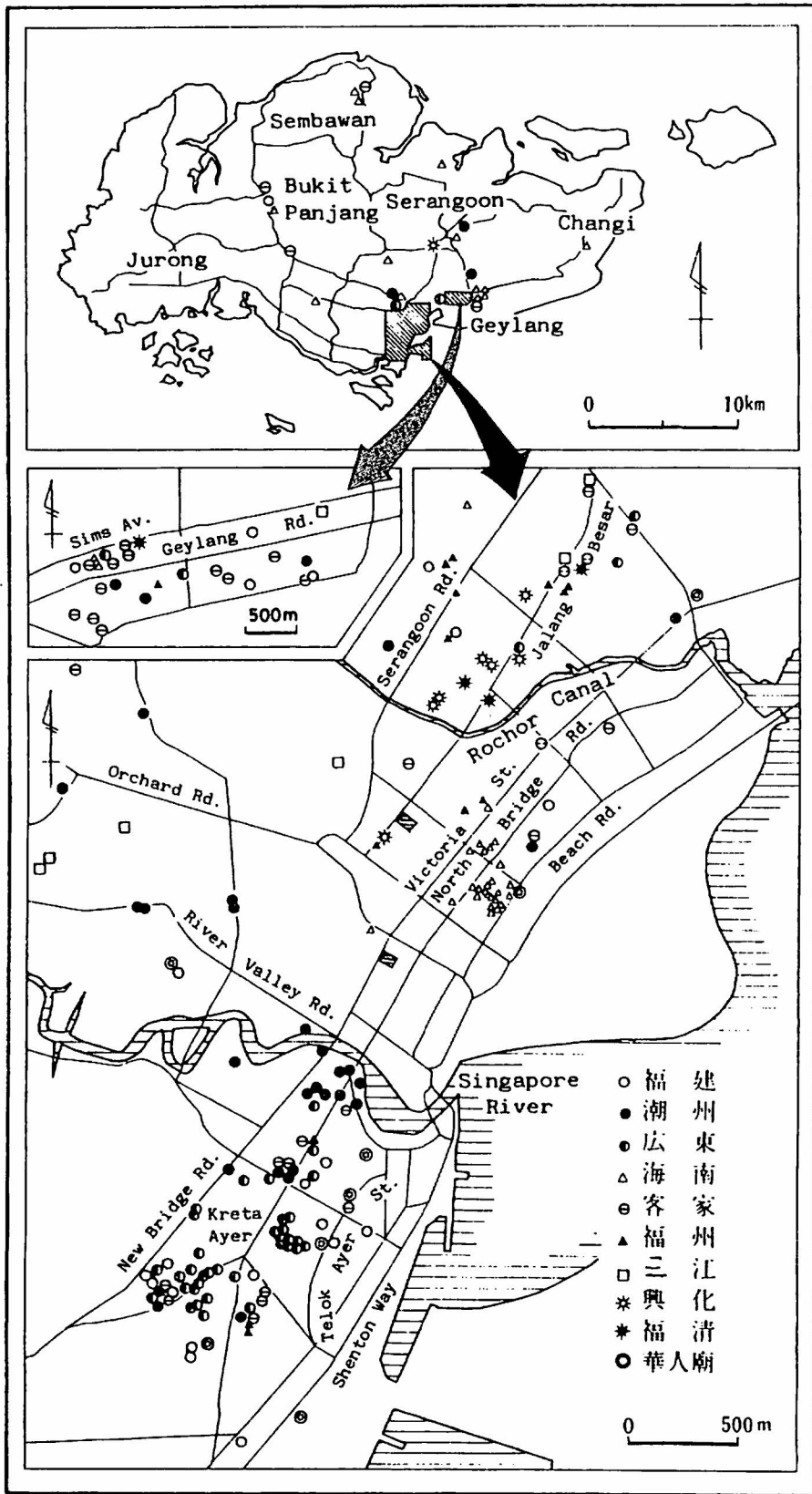


図10 シンガポール中心部における華人会館の分布 (1980年)

山下潜海：「シンガポールの華人社会」、82頁、大明堂、1988年による。

## VI. むすび

近年、東南アジアや中国の急速な経済発展に伴い海外華人に対する関心が高まっており、さまざまな学問分野から海外華人を対象にした研究がなされ、研究者の数も、論文や著書の数も年々増加してきた。このような状況の中で、地理学からの華人研究へのアプローチは少ない。

本稿では、華人研究において地理学が重要な役割を果たすことができる分野として、華人の分布、移動、居住、景観、土地利用など華人のさまざまな側面を地図化することが重要であることを論じてきた。そして、華人社会の諸特性を地図化したいくつかの具体的成果を検討してきた。しかしながら、この種の研究成果の蓄積は十分ではなく、今後は統計データに基づく地図化だけでなく、特定地域における詳細なフィールドワークに基づいた成果の地図化なども積極的に進めて行く必要があるだろう。

### 【付記】

本研究においては、平成11～13年度文部省科学研究費補助金基盤研究(C) (2)「世界のチャイナタウンの地域性と類型化」(研究代表者：山下清海、課題番号：11680081)の一部を使用した。

### 注

- 1) 山下清海：『東南アジアのチャイナタウン』、13-16頁、古今書院、1987年、および山下清海：『チャイナタウン—世界に広がる華人ネットワーク—』、6-9頁、丸善、2000年。
- 2) 山下清海：第二次世界大戦後、日本における東南アジアの地理学的研究—その成果と課題—。経済地理学年報、第38巻、第1号、37-50頁、1992年、および山下清海：東南アジアの都市・村落研究における歴史地理学の課題—野間晴雄報告によせて—。歴史地理学、第41巻、第1号、74-76頁、1999年。
- 3) 山下清海：民族集団のすみわけに関する都市社会地理学的研究の展望。人文地理、第36巻、第4号、312-326頁、1984年。
- 4) Chang, Sen-dou: The distribution and occupation of overseas Chinese. *Geographical Review*, Vol.58, pp.89-107, 1968.
- 5) 可児弘明編：『僑郷 華南—華僑・華人研究の現在—』、行路社(京都)、1996年。
- 6) 山下清海：福建省における華僑送出地域(僑郷)の地理学的考察—その地域的特色と移住先との結びつき—。可児弘明編：『僑郷 華南—華僑・華人研究の現在—』、38-55頁、行路社(京都)、1996年。
- 7) 斎藤一正：東南アジアにおける華僑の生態—その経済的地位—。人文地理、第13巻、第3号、242-251、1961年。
- 8) 山下清海：僑郷としての広東省潮州地方の社会地理学的研究—華僑送出地域と東南アジア華人社会との結びつき—。秋田大学教育学部研究紀要(人文科学・社会科学)、第41集、149-159頁、1990年。
- 9) 前掲1)、山下清海：『東南アジアのチャイナタウン』、82-87頁。
- 10) 前掲1)、山下清海：『東南アジアのチャイナタウン』、117-126頁。
- 11) Hodder, B.W.: Racial groupings in Singapore. *Malayan Journal of Tropical Geography*, Vol.1, pp.25-36, 1953
- 12) 山下清海：『シンガポールの華人社会』、50-66頁、大明堂、1988年。
- 13) 前掲12)、31-116頁。

## Chinese Migration to Southeast Asia and the Formation of Chinatowns from the Viewpoint of Mapping

Kiyomi YAMASHITA

Although studies on the ethnic Chinese communities have been increasing recently, geographical researches are still limited on this subject. This paper attempts to discuss the importance of mapping various aspects of the ethnic Chinese communities by analyzing the maps appeared in the geographical studies.

Geographers are expected to contribute to the understanding of the ethnic Chinese communities by mapping the findings based on intensive fieldworks..

Key Words: ethnic Chinese, migration, Chinatown, mapping,  
segregation, Singapore, Southeast Asia, China